

「異宗教コミュニケーション」のすすめ  
21世紀的宗教交流の提案

永田正治（歴史

研究家）

新時代の宗教交流

21世紀の宗教交流、協力を考えるには、二つの大きな潮流を踏まえなければならぬ。一つは、世界の多くの国が民主政体になり、国民が主権者になったということである。過去、君主の信仰は国民の信仰選択に決定的影響を及ぼした。しかし、今日、民主主義が機能している国では元首や首脳の信仰が国民に影響を与えることはないのである。

もう一つは、宗教版図が確定したことである。世界はキリスト教、イスラム教、仏教、ヒンズー教の四大宗教により宗教圏が形成されている。新宗教が台頭し、激しい信者獲得競争をする時代も過ぎ、宗教は棲み分けの時代になった。

世界のあり方は民主制による「市民の時代」になり、宗教は棲み分けによる「共存の時代」になった。「異宗教コミュニケーション」は、このような時代の流れに即した新しい形の宗教交流である。

宗教史も大変革を経た。キリスト教はプロテスタント改革により、司祭を中心とする信仰から信者一人一人が聖書を学び神の前に出るという転換を遂げた。仏教は、出家僧侶を中心とする上座部仏教から、信徒の救いを中心とする大乘仏教が誕生したのである。これらの改革は「一部の人」から「すべての人へ」という拡大転換だった。

同じように宗教交流も、「すべての宗教者へ」という拡大転換が必要である。「異宗教コミュニケーション」は、信者一人一人が他宗教の信者と交流を行うというものである。これにより宗教交流は、限らない広がりや普遍性をもつことになる。宗教連合体に加盟していない教団の信者も自由に宗教交流に参加できるのである。

多くの宗教者が教団の枠を越え、他宗教への寛容さをもち交流を行えば、異宗教間の対話、協力は画期的拡大と活性化を遂げられる。そうしなければ世界の宗教融和など到底不可能である。宗教史にかつてなかった精神の交流が「異宗教コミュニケーション」である。

なぜ宗教協力は難しいのか？

「宗教者がたがいに手をたずさえて平和の道を歩むほかに、宗教者が人類に貢

献する道はありません」。これは1965年、ローマ教皇パウロ6世が、第二バチカン公会議に招かれた立正佼成会庭野日敬開祖に述べた言葉である。この発言は、宗教の究極的使命が宗教協力による平和実現であると語ったことに他ならない。

1970年、庭野開祖が中心となり「世界宗教者平和会議」を開催し、昨年のウイーン会議で9回を数えた。また、「日本宗教連盟」や「新日本宗教団体連合会」などの宗教連合体も宗教交流、協力を行っている。これらの活動は宗教融和に貢献したが、いまだに宗教の交流は十分な広がりをもてない状況と言わざるを得ない。日本では、創価学会、天理教、真如苑、霊友会などの有力教団も、宗教連合体や世界宗教者平和会議に参加していないのである。

どうして宗教交流、協力は難しいのであろうか？ 最大の理由は、教祖が宗教交流について言及していないことである。イエス、釈迦、マホメットなどの世界宗教教祖は、宗教交流、協力に関する言葉を残しておらず、教義に定められてもいない。他宗教との交流という、宗教にとって重要で敏感な問題について、教祖の言葉に根拠を見出せないことが宗教交流拡大の根本的な障害要因になっている。

また、宗教間の対立関係によって生まれた軋轢が交流を困難にしている。キリスト、イスラム、ユダヤ、ヒンズーなどの間で行われた戦争や迫害の歴史が宗教交流を前進させない原因となっている。日本においては、過去、教義論争、信者獲得競争で争ったしこりによって宗教間の融和的交流が妨げられているのである。

### 新宗教の可能性

世界は伝統宗教が強く、韓国の宗教界もキリスト教と仏教が多く信者を有する。ところが日本は新宗教の力がたいへん強い国なのである。新宗教の特徴は強い改革意思をもつことで、常に少数者としての緊張感をもち、伝統宗教が成し得なかったことを成し遂げようと努めている。

新宗教に注目するのは、新宗教の存在が宗教全体の融和にとって極めて重要であることと、「異宗教コミュニケーション」は、少数者であり改革者である新宗教の信徒にこそ切実に求められるものだからである。日本とアメリカの実力ある新宗教を紹介する。

〈天理教〉天理教の教祖中山みき氏は1798年、すなわち18世紀に誕生した。この教団は4世紀をまたぐ歴史をもち、伝統宗教と新宗教の間にある教団といえる。

天理教の際立った特徴は、奈良・天理市に「宗教都市」をもつことである。

新宗教の宗教都市は、少数者である教団が理想社会のモデルを示しながら、多数者との融和のもとでビジョン実現を図る未来戦略として建設された。都市を建設すれば、教団の目的と他者の立場を調和しなければならず、融和的宗教でなければ宗教都市を維持、発展させることは不可能である。

天理市はヤマトタケルが「大和は国のまほろば」と詠んだ奈良の中心部に位置し、奈良は日本国家黎明の地である。すなわち「宗教都市・天理」とは伝統宗教でも持ち得ない精神的資産なのである。このような優れた宗教都市をもつ天理教は、日本の歴史と精神の核心と結びつく特別な教団といえ、その隠れた影響力は計り知れないものがある。

〈立正佼成会〉庭野日敬開祖が第二バチカン公会議に招待された理由は、「新しい宗教で、穏健な仏教教団として教勢を伸ばし、しかも会の創始者が現在の会長として活躍している」というものだった。「新しい宗教」、「発展し、穏健な教団」、「教祖が率いる教団」という厳しい条件があった。このような教団は極めて少なく、教団が宗教一致を積極的に推進することがいかに難しいかということを示している。庭野開祖の宗教協力活動は「狭き門」を通り成就したものだ。

庭野開祖は「世界宗教者平和会議」を開催する前に、日本の二大宗教連合体である「日本宗教連盟」と「新日本宗教者連合会」の会長に就任し、加盟教団は積極的に協力した。まさに宗教に寛容な日本の土壌を生かした成果だったのである。その成功のカギは、自分は「使い走りに徹する」と言い切った、庭野開祖の謙遜な人格にあった。この画期的な宗教者国際会議を推進したのが、伝統宗教ではなく新宗教の指導者であったことに注目する必要がある。

〈創価学会〉創価学会は自民党と共に日本の政権与党を構成する公明党をもつ。公明党は700万票の得票数をもつ政党で、最近、集団的自衛権問題をめぐり同党の動向が焦点になり存在感を増した。

創価学会ほど劇的な変化を遂げた教団もないのである。第二次大戦中、当局の弾圧により初代会長牧口常三郎氏が獄死し、二代会長戸田城聖氏は刑務所に収監された。1960年、会長に就任した三代会長池田大作氏は「邪教撲滅」という攻撃的目標をかかげ、創価学会を日本最大の宗教に成長させた。

1964年に政党を結成したが、1969年には出版妨害事件で大打撃を受けた。1975年にSGI(創価学会インターナショナル)を設立し、世界宣教に力を入れ、1995年に定めたSGI憲章では「仏法の寛容の精神を根本に他の宗教を尊重して、人類の基本的問題について対話し、その解決のために協力していく」と、宗教の対話、協力を謳った。すなわち排他的思想を克服し融和的宗教への改革を断行し、学会員の行動様式は「折伏から対話」へと一変したのである。1993年に日蓮正宗から破門され独立し、巨大な「新宗教」とし

て再出発した。

池田名誉会長は世界各地で講演する一方、多くの指導者、学者と対談した。1993年、ハーバード大学で行った「21世紀文明と大乘仏教」と題する講演は、宗教家であるにもかかわらず、西洋知識人の言葉を15箇所も引用する学術的な内容で、巨視的、本質的で、東西文明の調和を中心に据えたものである。創価学会の平和運動のスタンスは、宗教の枠を越え「文明融和」を目指すのが特徴である。

〈モルモン教：末日聖徒イエスキリスト教会〉モルモン教は、2011年の共和党大統領選候補ミッド・ロムニー氏が、熱心なモルモン教徒であることでも分かるように、アメリカ社会に強い影響力を及ぼしている。

また、独自の「国土」をもつ。南北韓をあわせたほどの広さのユタ州を開発し、州都のソルトレイクシティは巨大な宗教都市で、そこを拠点に世界宣教をすすめている。ユタ州は急速に発展し、治安が良好で、出生率が高く、このユタ州のあり方は、モルモン教の公益性を証明するとともに教勢の拡大と直結している。モルモン教は超大国アメリカで強い影響力を有し、理想世界のモデルを発信する「国土」をもつ、世界の新宗教の中で最も勢力のある教団といえる。

また、モルモン教はアメリカが神に選ばれた地とする歴史観をもつ。それは日本の天理市を世界の始まりの地とする天理教と似ており、ともに啓示宗教であり、宗教都市をもつ。両教団は宗教都市を信仰と活動のセンターに据え、強い「求心力」を維持しているのである。

一方、立正佼成会は宗教協力を推進し、創価学会は政治と国際交流に力を注いでいる。両教団は人間を中心に置く仏教らしく、人々に平和のメッセージをおくり、社会を改善することにより教団の目的を達成しようとしている。すなわち「発信力」の強化を重視するのである。

優れた宗教都市をもつ天理教。世界的に宗教協力を推進する立正佼成会、膨大な人的基盤を有し日本内外に影響を及ぼす創価学会、アメリカ政治に影響を及ぼし、国土といえるような広大な土地と宗教都市をもつモルモン教。これらは全て新宗教であるが、伝統宗教にもない宗教的資産と独自の影響力をもっているのである。

伝統宗教は歴史、文化を背景とした国民全体におよぶ「伝統の光」をもち、新宗教は信者の「信仰の熱」をもつ。伝統宗教は世界を救える規模をもつが、目的を達成できず、新宗教は世界のために活動しているが、世界を救える規模はないのである。

人類救済には両者の協力が絶対条件である。近代以降、多くの新宗教が誕生し、優れた教団が育った。この歴史現象のなかに、世界に強固な基盤をもつ伝

統宗教と、改革者である新宗教が結び付き、平和理想世界の形成に向かう歴史のプロビデンス(Providence:摂理)を感知すべきである。

「異宗教コミュニケーション」が目指すもの

前エコノミスト誌編集長アンソニー・ゴットリーブ氏は、『2050年の世界』(エコノミスト誌)で、「宗教はゆっくり後退する」と題し、「2050年には、世界の信仰者の数自体は増えているが、原理主義的勢力は後退し、最終的に地球を受け継ぐのは無宗教の勢力」と断じた。宗教が世界をリードする力はないという認識に立った予想である。

残念ながら宗教者はこれを一笑に付すことができない。現代宗教は、社会に進歩や平安をもたらす確かな役割を果たしていない。そのうえ多くの教団は孤立し、発展にも限りが見られる。各教団は自信があっても、宗教全体は、バラバラで、未来展望も見えないアノミー状態に陥っている。

宗教者はこの現実を直視しなければならない。どんなに巨大な教団でも単独では力に限りがあり、停滞状況を打開するには宗教は協力しなければならないのである。

統一教会は文鮮明師が積極的に宗教の対話、協力を推進した。宗教一致を世界救済の中心に据え、『世界経典』という宗教教義を包括した経典をもつ。新しいイエス解釈を示しキリスト、ユダヤ、イスラムの和解を進めるなど、宗教対立の根本原因まで踏み込み宗教融和を推進している。

統一教会は宗教協力を最も積極的に進められる教団である。人類の家族的連帯を提唱し、宗教は共に平和理想世界を建設する兄弟と考え、国連に宗教議会を設けるという具体的ビジョンを示しているのである。

「異宗教コミュニケーション」とは、宗教教団が行っている「公的」な宗教協力に、信者一人一人が行う「私的」な宗教交流を合流させるものである。宗教信者すべてが行為者になるので巨大なスケールをもつと共に、密度の濃い交流が可能である。誰でも、親戚、友人、同僚に他宗教の人がおり、すでに個別的に実現しているもので、それに新たな意味を付与させるのである。

「異宗教コミュニケーション」は新しい宗教者相互の関係と作法をつくり上げるものである。それぞれ聖書、仏典、各教団の経典を学んできた宗教者に対し、宗教の優劣を問うことは無意味である。改宗による二者択一を迫る関係を克服し、融和的关系の必要性和利益を強調する。

すなわち、論争に陥り易い異宗教の関係を、他宗教を批判せず、教理を押し付けず、他宗を賛美し、他宗教者に尊敬と礼節をもって接するという、融和的关系を宗教界に定着させるのである。

宗教は今日の停滞状況を克服しなければならぬ。経済や政治でも全体を把握しなければ問題解決ができないように、宗教の問題を解決し発展に向かうためには、宗教者も宗教全体を把握しなければならぬのである。宗教者は教団の殻に止まらず、他宗教に関心を持ち、宗教全体を知る努力をすべきである。

祈りは神とのコミュニケーションと言われる。次に信徒同士のコミュニケーションがある。その上で、「神の名」を異にする他宗教者とのコミュニケーションを行うのである。この第三のコミュニケーションは、宗教者に新鮮な刺激を与え、宗教を復興させる力をもつ。

21世紀の信仰者は、「信仰力」と共に、「異宗教コミュニケーション」により他宗との交流を促進できる「宗教力」を高めるべきである。それにより世界の宗教は、良き発信者であり良き受け手となった多くの宗教者により自然な形で融和、一致するのである。